

# 青いかき氷

弓月キリ  
月夜のよろず屋

## 目次

青いかき氷	プロローグ	6
青いかき氷	本編	8
青いかき氷	エピローグ	22
あとがき		26

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のもので、作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場しますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしております）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかSNSのDM等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどではできるだけように配慮して印刷・製本・制作をしておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

## 青いかき氷 プロローグ

青は嫌い。私の大事な人を奪った色だから。

冷たく

青く

暗く

変化していく

私から離れていく

温かみが失われていく

まるで……氷みたい

だから、氷も嫌い。寒いのも嫌いだけど、冷たいのはもっと嫌い。『あの時』から嫌いになつてしまった。



## 青いかき氷 本編

「うわー……。見た目からしてヤバイ色してる……。スープが真っ赤。なんで平気な顔して食べてるの……」

目の前の君がドン引きしているけれど、気にせずに激辛ラーメンを食べ進める。辛い物は平気だけど、今はもっと平気を感じる。

「健康のためにはいいことでしょ？ 見た目よりも辛くないよ？ 食べてみる？」

「やだ。前もそんなことを言っていたから食べたの忘れたの？ ヤバイ辛さしてるからね、それ！ あとね、涼むのも大事なことだよ！ 熱中症は怖いんだからね!？」

汗をかかないのも問題だから、間違つてないと思うんだけどなあ。

ブルーハワイ味のかき氷を食べながら、私に同じ説教を始める、外見も性格も似ていないのに何故か『彼』によく似ている目の前の君は、今日も青いTシャツに青のジーンズを着ている。私も君も、それぞれ、仕事に学業にと忙しい毎日を過ごしているのに、こうして毎週のように理由をつけて会っている。私にとっては可愛い弟的な存在であり、『彼』にとっては従兄弟で、私にとっても大切な幼馴染みの一人。

私の『事情』を知っていても、青い服を着てきては、青くて冷たい食べ物を私の目の前で食べる無神経さは好きじゃないけれど、私に変に気を遣うことがないことを有り難いとも思うの

で、嫌になれないでいる。会うと、どうしても『彼』を思い出すから、嫌いになつて会えなくなつたらいいのにと思いつつも、会えることを素直に喜んでもある自分がある。

「はいはい」

「もう、何もわかつてない……」

私がさらつと流すと君は呆れたような顔をするのは、もう何度目だろう。

私は『彼』との思い出だけで、この先も死にきれずに惰性で生きていくと、そう思っていたのに。

こうして、『彼』に似ている生きているものに縋つて、君を『彼』の代わりにしようとしていることに気づいてしまった。

外見も性格も『彼』に全然似ていないはずなのに、どうして、君は『彼』によく似ているのだろう。だからこそ、この想いは決して認めてはいけけない。誰にも知られてはいけけない。この想いは、私と『彼』、君に対する裏切り行為だから。

やっぱりそうだよ。四十九日も過ぎたことだし、そろそろケジメをつけようか。こんな浅ましい私は、いない方がいい。どうせ、死ぬなら、殺されるなら海あなたがいい。

「——姉」

そういうえば、夏本番になって、いつもなら『彼』か君が言うはずの「海に行こうよ」はまだ聞いていないけど、君なりの、せめてもの優しさなのだろうか？

「涼姉ってば！」

「え？」

「もー。やっぱり頭がぼんやりしちゃうてるんじゃないの？ ちゃんと水分は摂らないとダメ！」

「ごめんごめん。考え事してただけだから。気にしないで」

「ほら。ちゃんと水分を摂らないとダメ！」

水を飲まないと許してくれなさそうな様子で差し出されたコップの水を飲み干すと、思ったよりもどが渴いていたのか、スッキリとした。もう一杯、自分で水を注いで飲み干すと。

「ねえ。涼姉は、来週の土曜日の予定は？ 空いてる？」

来週の土曜日は、私が死のうとした日だけど、まあ、この日じゃなくてもいいか。結果は変わらない。最期に、君と思い出を作ろうか。

「空いているけど……」

「海に行きたいから、付き添いをお願い」

「……」

優しくもなんでもなかった。どうして、よりにもよって海なのかな……。こういうところ

が子供の残酷なところなんだと思うよ。



ああ、『彼』は海が好きだった。

海の変化のすべてを楽しんでいた。

私には理解できない。昔も今も、おそらく、この先も。

私から、『彼』と幼馴染みとの時間を奪って、私の一番を独り占めしたライバルでもあり、

私達から『彼』を奪った、憎き敵。

これが、私が海あなたに抱く想い。

「りょうねえ！」

でも、だからこそ、私の最期の場所を選んだ。

「涼姉っ！」

ああ、もうすぐだ。私は、大嫌いな海あなたの冷たい水で冷やされて、もうすぐ永遠に……。

「涼姉っ!!」